

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	廣 野 貴 之
論文審査担当者 主 査 整形外科 中 村 雅 也 麻酔学 山 田 高 成 病院薬剤学 大 谷 壽 一 衛生学公衆衛生学 岡 村 智 教 学力確認担当者：金井 隆典 審査委員長：山田 高成 試問日：2025年 3月31日				
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Medication-based profiling of older orthopedic patients: a multicenter cross-sectional study (高齢整形外科患者における薬剤使用に基づく患者特性の解析：多施設横断研究)				
高齢社会においてポリファーマシーやPIMs (potentially inappropriate medications) の内服は健康面や医療経済面で極めて重要な問題である。本研究では、整形外科疾患を有する高齢者のポリファーマシーやPIMs、FRIDs (fall risk increasing drugs) について調査を行った。その結果、全体の57.4%がポリファーマシー、66.0%がPIMsを内服しており、特に脊椎変性疾患において有意にその頻度が高く、FRIDsは群間で有意差を認めなかった。また、脊椎疾患において非ステロイド性抗炎症薬と制吐剤の内服が多いことを明らかにした。 審査では、骨折の受傷機転や部位、生活習慣病における分類、内服薬処方 of 時期に関して質問され、これに対して、本研究の調査対象者数は少なく、骨折や生活習慣病の詳細は検討しておらず、内服薬は入院時常用薬であると回答された。次にPIMsは患者によって必要性が異なるのではないかと質問され、患者ごとにその必要性を判断することが重要であるが、現時点では検討されていないと回答された。次に本研究の動機について質問され、これに対して、整形外科疾患を有する高齢者の薬物使用状況を明らかにすることが主目的であり、その過程で転倒とFRIDsの関係も明らかにすることが副次的な目的であると回答された。次に疾患の発症と薬剤処方の時系列が骨折群では他と異なるのではないかと問われ、これに対し、骨折群では併存疾患への常用薬のみだが、他の群では変性疾患自体への処方も含むと回答された。次に、実臨床への応用と整形外科患者以外への調査について問われ、これに対して、実臨床への応用としては患者ごとに処方内容を吟味し、不要な薬剤の削減を心がけることであり、また、整形患者以外への調査に関しては、海外で一般高齢者も含めた転倒患者でFRIDsの内服率が高かったとの過去の報告があると回答された。また、胸椎疾患を除外した理由を問われ、有病率が低いことなどにより除外したと回答された。次にオピオイドが本研究で検討されていない理由について質問がなされた。これに対して、本研究では処方頻度の高いPIMsに絞ったが、重要な薬剤であり今後調査していく必要があると回答された。次に、ポリファーマシーと骨折治療の成績の関係、対象の年齢が適切であったか問われた。これに対し、術後せん妄や術後死亡率が増加するとの報告があること、今後は超高齢者でも調査する必要があると回答された。次に、合剤の取扱いと頸椎と腰椎に分類した理由を問われ、合剤は1剤と数え、カテゴリーは成分ごとに個別に分類し、頸椎と腰椎は病態が異なるためサブグループ解析が行われたと回答された。 以上、本研究ではさらに検討すべき多くの課題が残れているものの、整形疾患を有する高齢者の服薬状況を理解する上で有意義な研究であると評価された。				